佳作

弟のカマキリ

徳島県 徳島文理小学校六年　中村 拓夢

二年前の夏、弟は庭でカマキリをつかまえた。そしてそのまま家で飼うことになった。

でもぼくは飼ってほしくなかった。なぜならぼくはアレルギー体質で虫が嫌いだからだ。見るのも触るのも嫌で、本当に大嫌いだった。

弟は昆虫が大好きで、そのカマキリのお世話を一生懸命に毎日するようになった。カマキリのエサになるバッタを捕りに公園へ行ったり、フンをそうじしたり、お水をあげたり、意外に大変そうだった。

やがて秋になり、エサになるバッタなどの虫がいなくなり始めた。そこで、無糖ヨーグルトやかまぼこなどを与えてみたら、おいしそうに食べた。カマキリは動いている物しか食べないので、弟は糸でかまぼこをつるして、ゆらしながら与えていた。

ぼくはカマキリが人間の食べ物を食べたので、少しホッとした。虫は嫌いだけど、が死はかわいそうだと思ったからだ。

十一月になり、カマキリは虫かごに卵を生みつけた。さらに数日後、また卵を生みつけた。二個目の卵は生みつける瞬間を見る事ができた。白い泡みたいな卵を、ゆっくりゆっくり時間をかけて生みつけた。

カマキリは卵を生み終えると、疲れて死んでしまう事があるらしいので、弟は心配していたが、その後もカマキリは元気だった。ぼくはまたホッとした。

十二月に入って寒くなったので、夜は暖かい弟の部屋に虫かごを運んで、一緒に寝るようになった。この頃は食欲もあってまだ元気に動き回っていたが、十二月末頃から、だんだん食欲が落ちてきて、元気がなくなり始めた。

弟は心配して、わりばしの先にヨーグルトをつけて、カマキリの口の前にさし出して、エサをあげていた。さし出すと食べていたので、ぼくはホッとした。そして無事にカマキリは年を越す事ができた。

でも冬休みが終わった頃から、カマキリはケースの上に登らなくなり、底でじっとして動かなくなった。弟がヨーグルトをさし出しても、だんだん食べなくなった。ぼくも心配になって、一日に何度もカマキリの様子を見るようになった。

それから数日後、とうとうカマキリは死んでしまった。大カマキリと思えないほどに、小さく丸まって死んでいた。

弟は目に涙をためて、じっとカマキリを見つめたままだった。弟にかける言葉が出てこなかったし、ぼくも悲しかった。

約半年間、カマキリと一緒に生活をして、虫の命も尊い事を学んだ。カマキリのお世話をやりとげた弟をすごいと思った。

今年の夏、また弟はカマキリを飼い始めた。ぼくにできる事は手伝ってみようと思う。そして先代のカマキリのように、長生きしてほしい。